

## シャルロッテ・フォン・カルプの伝記について : 1985年版と2006年版

恒吉, 法海  
九州大学大学院言語文化研究院国際文化共生学部門 : 教授

<https://hdl.handle.net/2324/9910>

---

出版情報 : かいろす. 45, pp.40-65, 2007-12-03. Kairos-Gesellschaft  
バージョン :  
権利関係 :



# シャルロッテ・フォン・カルプの伝記について

— 1985年版と2006年版 —

恒 吉 法 海

## 0 序

2006年 Ursula Naumann: Schillers Königin. insel taschenbuch 3234 が出版された。これは同じ著者の Charlotte von Kalb. Eine Lebensgeschichte (1761-1843) Metzler. 1985 の改訂版である。旧版の翻訳を計画していたが、著者の意向はインゼルの新版を底本にして欲しいということだったので、新たに新版も訳すことになった。旧版は四百字詰め原稿用紙で900枚強、新版は800枚弱で、旧版の半分ほどに手を入れる感じになった。改訂の主なものは、若干の事実の相違の他に、力点の置き方の微妙な違い、些末な歴史的事実の消去であるが、消去された細部にも面白いと思える部分が少なくなく、それを紹介しておきたいと思った。本稿ではインゼル版を新として引用し、メッツラー版を旧として、他に同じ著者のシラーの妻とその姉との三角関係を扱った Schiller, Lotte, Line (insel taschenbuch 3079. 2004) を三角と略して引用し、テキストの異同について論評することにする。

まずは旧版の「前置き」と新版の「あとがき」について述べる。

### 1) 共通するのは次の3点である。

1-1 <裕福な、由緒正しい貴族の出自で、早くに孤児となり、他人の手で育てられ、気に染まぬ男と結婚し、二人の偉大な作家と恋愛関係に陥り、その両者とも自分にとって不幸な結末に至り、家計は破産し、夫と一人の息子は自殺し、晩年長く盲目で孤独であった。しかしシャルロッテ・フォン・カルプはどんな不幸、敗北に直面しても、けっして長いこと屈服し、挫折することはなかった、彼女はヘルダーが述べたように、常に湧き出る力の源泉を自らの裡に有したからである。「空想の義捐金は尽きることがないからです」> (旧 S.9. 新 S.389)。

1-2 <単に引用からなる本というベンヤミンの夢、史実がさながら自

ら語られる本は私の夢でもある> (旧 S.9. 新 S.393)。

1-3 先行研究 Klarmann, 1902 への謝辞 (旧 S.10. 新 S.393)。

## 2) 力点の相違

### 2-1 派生的存在としてのシャルロッテ (旧版)

<本伝記はシャルロッテの言葉で言えば、「女性存在」を扱っている、恐らくこの存在に「人間存在」の基本的特徴もより鮮明に描かれることだろう。シャルロッテ・フォン・カルプは誰であったか誰かに伝えたいと思うとき、まず出てくる最初の言葉はシラーとジャン・パウルの女友達である。しかしこのような派生的存在も長いこと「女性存在」にとっては代表的なものであった> (旧 S.9)。

### 2-2 文学作品のモデルとしてのシャルロッテ (新版)

<彼女はシラーが『ドン・カルロス』を書いたとき、シラーの女王であったし、そしてジャン・パウルの『巨人』の中に見紛うことなく、印象的に現存しているジャン・パウルのリンダ・ドゥ・ロメイロであった> (新 S. 393)。

勿論新版でも「派生的存在」としての女性存在、ジェンダーの視点が失われているのではないが、ただ新版ではシャルロッテ・フォン・カルプはシラーとジャン・パウルにとってモデルとして重要な存在であったということが力説され、モデルでしかなかったという視点は弱くなっているようである。

その証拠というほどでもないが、序言での正書法についての重要な報告が新版では省略されている。

### 2-3 シャルロッテの正書法

<史実的真實の一つに厳密に考えれば当時の普通の正書法による引用も考えられるであろう。しかしこれは法外に揺れており不統一であるので、私はより読みやすいように今日有効な正書法規則に統一することに決めた。シャルロッテの句読法の独自性はいずれにせよ「示唆的に」保たれている、表現価値が感じられるからである。

このような正書法通常化はこの本のヒロインの場合特に重要なことである、彼女は当時の多くの教養ある女性同様に奇体な正書法を有している。少なからぬ男性達によってこのことはそれどころか好意的に見られていた。「教養ある女性の場合非正書法は女性的愛らしさの華である」とルートヴィ

ヒ・ベルネはなおも或る書評の中で書いている。それから19世紀後期の学者達は「非正書法」に全く何も愛らしいものをもはや感じていない。1882年シャルロッテ・フォン・カルプのジャン・パウル宛の手紙を出版したパウル・ネッリッヒは書簡を彼女の「正書法あるいは句読法なるもので印刷させること」は全く不可能と見た。「そうしたい気にもならない」と彼は述べている、「私は単に『理解した、重要な、社会、個人的に』といった単語のみを挙げるが——シャルロッテはずっとごく簡単な規則さえも間違えたということしか明らかにならないであろうからである」。我々も間違った正書法に対しては無教養の印しか見なくなっているのです、シャルロッテの手紙の引用を原典に忠実に再現したら、訂正した場合よりももっとひどく偽造することになろう> (旧 S.10)。

## I シラーとジャン・パウルへの影響

### 1) シラーに対して

#### 1-1 シャルロッテのフランス古典劇の教養。

この教養のせいでシャルロッテは同時代の女性とかなり隔たりがあるとナウマンは見ている。<それでもフランス古典派の高貴で簡潔な警句風の文体は、彼女が自分の記述や多分に言葉遣いをも形成するときの根本的文飾となった> (新 S.37. Vgl. 旧 S.36)。

#### 1-2 シャルロッテのシラーへの寄与。

他にシラーの無名時代から彼の才能を信じ、彼を支援したことが挙げられる。<シャルロッテが多分本質的に関与した急激な進歩である。彼女は、彼が偉大な自由のドラマを書いて高貴なものとしたとき、シラーの女王であった。「私はよく『群盗』や『フィエスコ』の女性役について、遠慮なくあれこれの特徴のどの点が欠点と見えるか話したので、私は『ドン・カルロス』の女性の性格描写に若干の影響を及ぼしたかもしれない」とはるか後になって彼女は控え目に言ったとされる。しかしシラーにひらめきを与えたのは、とりわけ多分先に述べたドラマ的伝記的人物配置の類似であつたろう。あるいは逆に言えば、これまで抽象的な、歴史的素材からの発案であつたのだが、今や模倣可能となったのであろうし、想像を経験で補強できるようになり、『ドン・カルロス』抜きの場合よりもそれ故恐らくはるかにより集中してシャルロッテとの関係を体験し、演ずることになったのであろう> (新 S.102. Vgl. 旧 S.97)。

1-3 新版ではシラーがシャルロッテのことをX X X夫人としていることが明らかにされる。

＜シラーはいつものように火に油を注いでいる。かつてははなはだ崇拜された高貴な女友達、彼の『ドン・カルロス』の女王の名前を今や手紙の中では三つのXの字で置き換えている。「X X X夫人のせいで本気で心配している。何だってやりかねないのだから。イタリアの空の下でなくても、或る時には彼女と遭わないよう勧めたい。情熱と病身が一緒になって時に狂気の境にまで導かれたことがあるのだから」。

或る種の残忍な満足感を抱いて、シラーとその友の二人の女性達は、その間に間近な結婚について知ったシャルロッテが自制を失う様を見守っている＞（新S.160, 「ある種の」以降 Vgl. 旧S.142）。「X X X夫人」云々は（三角S.150）で初めて紹介されている。

1-4 手紙の焼却。

何でも保存したがるドイツにあって、シャルロッテの行為は潔い印象がする。＜シラーとの文通を彼女は或る時シラーの結婚後すぐに焼いている＞（旧S.148. Vgl. 新S.63）。

## 2) ジャン・パウルに対して

2-1 シャルロッテのジャン・パウルへの寄与。

『巨人』のリンダのモデルである。＜シャルロッテはジャン・パウルの最も重要な最も輝かしい女性像のためのモデルとなった。「彼女の思考、愛、没落を私は私の最良の作品と見なす」。陽光のように彼女は輝いて、彼の詩作のすべての他の青白い有徳な、感傷的な女性像を圧倒している＞（新S.260. Vgl. 旧S.229）。

2-2 実体は古風なジャン・パウルの女性観。＜ジャン・パウルはシャルロッテとの男女間の戦いをスリルのあるものと思い、自分の作品に刺激を受けたが、しかし彼女から何も学ばず、受け入れなかった。彼は女性に対する保護者然とした軽視に留まっていた＞（新S.224. 旧S.201）。ジャン・パウルの女性観は同じ箇所（『月蝕』）で分が悪いということを夙にギュンター・デ・プロインも『ジャン・パウルの生涯』で指摘している。しかし最近では『ジーベンケース』の小市民的主婦レネッテに生きた女性が描かれていると解釈する斬新な研究もある（Vgl. Elsbeth Dangel-Pelloquin: Eigensinnige Geschöpfe. 1999 Rombach）。

2-3 新版ではモデルとして描かれたことを光栄と見る視点が加わっている。

＜彼女はより無愛想に、大胆に、独自になっていった。これは不幸や年齢も関係していただろうが、しかしジャン・パウルのお蔭で自負心が増大したことも関係していた。確かに彼は彼女を女性として拒絶したが、しかし偉大さへの彼女の計画を受け入れ、思っても見なかった具合に高めていた。「私を巨人族の女と呼ばないで」、しかし何という役割であろう。このような偉大な愛の劇の後で日常の惨めさに戻ることは何と難しかったに違いないことか＞（新 S.241）。

2-4 『巨人』のアルバーノとリンダの対立。

この対立にナウマンは男性の名声欲と女性の愛の対立を見ている。シラーとの思い出も伏線にある。＜シャルロッテによって促進された [シラーの] 野心、名声欲は彼女に敵対する＞（新 S.105. Vgl. 旧 S.98）。＜ヴァイマル征服のために彼 [シラー] は来たのだった。「偉大さ、傑出、世間への影響、自らの名前の不滅」が彼の「英雄的目標」である＞（旧 S.126. 新 S.126）。＜シラーがシャルロッテをマンハイムで文学的名声のために棄てたように——いずれにせよ彼女はそう見ていた——『巨人』の中でアルバーノはリンダの許を去ろうとする。フランス革命軍の側に立って戦争に行き、つまり偉大な名声を得るためである＞（新 S.265）。旧版ではこの箇所の解釈にシラーの鐘の歌を援用している。この歌を背景にすると対立がより歴史的により一般的になるようである。またこの対立はシャルロッテの未完の小説『コルネリア』が女性の使命を子供を生むことに置き、そしてその子供に名声を託すという古代のコルネリアの逸話を紹介していると知ると興味深いものがある。（Vgl. 旧 S.306. 新 S.350）。

|                |           |
|----------------|-----------|
| ＜男性は敵対する生活へ    | そして有能な主婦、 |
| 出て行かなくてはならない、  | 子供達の母親は   |
| 働き努め           | 内側で管理し、   |
| そして植え創造し、      | 家庭の中で     |
| 策略を弄し、もぎ取り     | 賢明に支配し、   |
| 競い挑戦して、        | 娘達を教育し    |
| 幸福を求めなければならない。 | 息子達をしつけ、  |
|                | 休むことなく    |

熱心に手仕事をする。…>

(Vgl. 旧 S.234)

2-5 ジャン・パウルの手紙焼却。

<ヘルマン・フィヒテが遺贈されることを願い、その予定であったジャン・パウルからの彼女宛の手紙をシャルロッテは多分この後消却してしまっている。以前シラーの手紙をそうしているように、それ以前に勿論多くの手紙を処分していたことであろう。「後になって、これは私にとって失われたのではなく、多くの人々にとって失われたと気付いた」、と『思い出』の中で言及している。しかし彼女にとって、天才の手紙といえども唯一ただ受取人のものであるという確信はより強いものであった。「他の人々では嘲笑に変わる」> (新 S.379. Vgl. 旧 S.343)。

2-6 初々しかったシラーとジャン・パウル。

<ジャン・パウルが次の日々や週にオットー宛にヴァイマルから書いていることは、多くの点でケルナー宛の最初のヴァイマルからのシラーの手紙を思い出させる> (新 S.209. Vgl. 旧 S.191f.)。逆に或る論者はジャン・パウル宛のシャルロッテの手紙にはシラー宛とも読める文があると論評している。(Vgl. Friederike Fetting: „Ich fand in mir eine Welt.“ 1992. Fink. S.43)

## II 事実確認

### 1) 書籍商シュヴァーンの手紙

これは単なる文面の確認のはずだが、なぜか本場の学者は手間取っている。

<途中での最初の手紙の中の一つで、シラーはマンハイムの出版者で彼の旅館の主人の娘、マルガレーテ・シュヴァーンに結婚の申し込みをして、拒絶されている> (旧 S.98)。

<シュヴァーンの返事は残されていない。彼がシラーを断ったか、それともマルガレータに自ら尋ねるよう助言したか不明である。いずれにせよ、シラーはこの結婚計画の実現にもはや関わっていない> (三角 S.33)。

<ひょっとしたら彼は自分を「因習や状況」が隔てている女性から逃げたのであろうか、彼女から圧力を感じていたのだろうか。何故彼は、ライプツィヒの途上にあるのに、マンハイムの書籍商シュヴァーンにその娘マ

ルガレータへの求婚の手紙を書いたのであろう。シラーの職業的状況を肯い、確固たる十分な収入と結びつけるものであったとされる多分に勇気づけられる返事に、彼はそれからもはや応答していない> (新 S.106)。

## 2) シャルロッテは得恋者に嫉妬の手紙を書いたか。

これについては旧版では判断を保留しているように見えるが、新版ではシャルロッテの無罪を告げている。

<妹の結婚後初めて (そうシャルロッテは『思い出』の中で記している) 彼女は或る知人の女性からこう聞いたそうである。マイニンゲンの社交界は彼女をヴァルトナー・フォン・フロイトシュタイン宛の匿名の手紙と関連付けている、「下手な、誤字の多い手紙で、次のような内容よ。ヴィルヘルミーネは以前からの約束があるので、彼は彼女を選ぶべきではない。彼女には姉妹や従姉妹があり、同じように若く、それでいてもっと美点がある、と。彼はそれを嘲って笑い、何人かに披露したの。字はあなたのではないけれど、あなたからの手紙に違いないと皆が言った。私はそんなはずはないと言ったわ、でも女の人達が言っているのは、あなたはこんな裕福な縁組をつかみそこねて、くやしくて死んでしまうに違いないということ、殿方はこんな策略をしでかすとは大胆なものと言っているわね」。シャルロッテがこの嫌疑の話と関係しているのか関係していないのか判然としない。この嫌疑を隠していた方がより自然で、より無垢であったというべきであろう。数年後今一度シラーの花嫁宛の匿名の手紙が彼女と関連付けられている> (旧 S.64)。

新版では「シャルロッテがこの嫌疑の話と」云々以下が削除されている。(Vgl. 新 S.63)

<ロットヒェンに良い助言を与えている匿名の手紙「顧問官シラー氏の心を求めず、...詩人を追いかけず、むしろ立派な主婦におなりなさい」も彼女のせいにされている> (旧 S.142)。

<ロッテに良い助言を与えている匿名の手紙「顧問官シラー氏の心を求めず、...詩人を追いかけず、むしろ立派な主婦におなりなさい」も彼女のせいにされている。これは今日我々が知っているように余りに不当なことである> (新 S.160)。

### 3) ジンクレアの死

ヘルダーリンの友ジンクレアの死に関して、旧版と新版では説明が異なる。

＜イーザク・フォン・ジンクレアは解放戦争でオーストリア軍に加わって戦った。大尉として彼はフィリップ・フォン・ヘッセン＝ホンブルク皇太子の軍団に属していた。皇太子は戦功のお蔭で、国土を有しない君主の立場から、直にまた引き継ぐべきものを得ることになった。ウィーン会議でヘッセン＝ホンブルクはその歴史で初めて全き君主権が認められた。ウィーンでその小国の代理を勤めていたジンクレアは交渉の幸運な結果をもはや体験することはなかった。彼の愛する母の死後わずか数週間して彼は1815年卒中に襲われた。――ファルンハーゲンが後に広めたように、妓楼ではなかったけれども、しかし珍しい状況下であった。「ジンクレアはオーストリア皇帝機関の少佐に任命された。この昇進は――誰にとっても彼にとっても――驚きであった。彼は制服の寸法を計って貰うために仕立屋の店に急いだ。彼の寸法が計られているときに、彼は卒中に襲われ、倒れて死んだ。彼の許には名前や住所の手がかりとなるものがなかった。彼は晒され、死体はようやく二日後に判明した」＞（旧 S.284）。

＜ジンクレアは交渉の幸運な結果をもはや体験することはなかった。彼の愛する母親の死後ほんの数週間して1815年4月29日彼は卒中に襲われた。後にファルンハーゲンが広めたように妓楼であったかもしれないが、いずれにせよ特異な状況下の死であった＞（新 S.319）。

### 4) シャルロッテの満足度

これは誰の人生でも評価は難しい。単に主観的なことだからである。旧版では年代順に、推測も交えて説明しているのに対し、新版ではシラーの明察とシャルロッテの晩年の手紙を効果的に、より客観的に引用している（4-6、4-8 参照）。

4-1 男系世襲の貴族社会ではまず女性という不満足な点があった。（新旧共通）

＜子供は女の子であった。激しく母は叫んだ。『生まれなくてよかった』＞（旧 S.11. 新 S.14）。

4-2 旧版では自分の美貌に満足していない。

＜上品な面立ち、優しい顔の上の霊のようなほとんど大きすぎる目はど

の人にも気に入った」とシャルロッテは『コルネリア』の中の或る少女のポートレートについて言っていて、多分自分自身のポートレートのことを考えていたのであろう。この小説では控え目ながらも再三、大抵の女性に生まれついている、あるいは刷り込まれている願い、つまり外面だけで、ただ姿を現すだけで作用し、心を獲得し、征服したいという願いが顕になっており、美しい衣装に対する喜び、モードへのセンスが顕になっている。しかしシャルロッテに出会い、その出合いを語る人は、彼女の「内実」を大抵注目し値するものと見なして、彼女の快適な、しかし（大きな目を除いては）さほど人目を引かない外見のことは内実故に全く忘れ去られている。これは多分彼女の自らの計画には合うものであったが、しかしやはり傷つくもので、決して告白されることのない不安の源泉であった（旧 S.60）。

シラーの『群盗』では首領は一目で分かるか問われる場面がある（第3幕、第2場。Kosinsky と Moor のやり取り）。シラーの最後の未完の作品ではデメトリウスが本物かどうか問題になる、つまり出自の確かなものならそれにふさわしい雰囲気が出現するはずであるという問題意識がある。ナウマンの女性存在に対する問題意識は男性存在にも適用できそうである。もっともジャン・パウルの場合は全体的に見て、外面は揶揄の対象である。例えば男性の好色度は顔では判断できない（『ヘスペルス』ハンザー版 Bd.1.S.609）。ジャン・パウルの老いたシャルロッテのことを堅い外皮と山の精の譬えを用いて表現している（新 S.284表題）。この興味深い文章はいずれにせよ女性の著者の意識とも関わっており、新版で削除されたのは、著者と関連されることを避けるためであろう。

#### 4-3 旧版での継母の遺言。

＜シャルロッテは彼女の冷たくなっていく手を握り、更に最期の言葉を、最期の願いを聞き取ったり、思い付いたりしている、これは残された者達への最後の遺言として、このような臨終の場面を完成させるものである。『満足して生きなさい』、私はこの言葉に私の運命が定められていると思ひ込んだ』＞（旧 S.53）。

#### 4-4 旧版での南ドイツの貴族夫人との違いの自覚。

＜これらの夫人達のように成長させられていたら、彼女の自負心は助長され、彼女の本性は隔離と静謐さの中で形成されたことだろう。そうしたら自分はかくも囚われ、固定され、不満で、永遠に外部からの幸運、幸運

をもたらす者を求めることはなかったであろう。そうしたらまた、継母が臨終のとき気を失いながら願ったように、調和がとれて満足したものになったことだろう。他の女性達のようになるという願いはシャルロッテにとってこれまで多分何かうれしくないものであったろう。しかし個性と自立を犠牲にすることなく、幸せな順応の例を眼前に見せている南ドイツの帝国貴族の夫人達は夢の対象になっている。この夢を（矛盾の多いものだが）シャルロッテの『コルネリア』の文芸は伝えている、これは当時彼女が耳にした伝記の多くを収めているものである>（旧 S.109）。

#### 4-5 ヘルダーの不满（新旧共通）。

<しかしヘルダーはこれだけ心を捉えることができる一方でまたしばしば、深い内的な不満から傷つけがちであって、この不満を彼は外的状況に由来するとしていたが、しかし彼自身根本的に分かっていたように、何の外的状況も変えようのない不満であった。彼には性格の特性が欠けており、これはシャルロッテにも欠けていた——つまり幸運のことで、ヘルダーの考えとして彼女が『思い出』の中で伝えているように、「幸運あるいは不運は健康や体力同様に主観的特性である。勇気のある者は得、大胆さは幸運に属する。倫理的な勇気も有しなければならない、と彼は語った。幸運はそれ自体神秘的な能力である」>（旧 S.137. 新 S.147）。

#### 4-6 新版でシラーがシャルロッテに感ずる不満。

<「彼女は奇妙に移り気な人物で、幸福に感ずる才能を欠いている。自身有しないものをどうして与えることができよう。貴女が夫人について下した判断を私はかなり正しいと思う。彼女の好奇心には用心しなければならないし、自ら容赦なく導かれてしまう彼女の一貫性のなさに用心し、それに他人の美点に寛大でない性分の彼女の厳格精神主義にも用心しなければならない」>（新 S.156）。

#### 4-7 ヘルダーリンの不满（新旧共通）。

<ヘルダーリンが彼女を拒んだのは、ひょっとしたら彼女が余りに彼と似ていたからかもしれない、シラーに対する彼の愛の点でもそうであった。「何故私はかくも貧しく、精神の富を求めてかくも多くの興味を抱かなくてはならないのでしょうか。私はきっと幸福になれないでしょう」と彼はシラーにヴァルター・ハウゼンから書いている。シャルロッテはこの近さを認識していたばかりでなく——シラー宛の手紙にこうまとめている。

「時折——ヘルダーリンに不満を抱く唯一の人間は、——彼本人です...」>

(新 S.184. Vgl. 旧 S.175)。

4-8 新版で強調される晩年の満足。

＜「あなたが私の肖像をヴァルタースハウゼンで御覧になったとのこと、心打たれました。私はとうに無くなったものと思っていました。もはや見ることはかなわぬでしょうし、見たくありません。この時代から私が学んだこと、これは錯誤、欺瞞、妄想について教えてくれました。こうしたことすべてのお蔭で、私は人生の後期を築き、照らすことができました。どのような関係も私に満足を抱かせることはできなかったでしょうし、多分他の関係はすべてもっと厭わしいものを生じさせていたことでしょう。私の生活は苦痛に満ちたものと結び付いていますが、しかし他の状況にあったときよりも屈託がありません。偶然の導きでしょうか。それとももっと己惚れて言うなら、摂理の導きでしょう。私は子供っぽいけれども、自分には秘密の守護神がいると言いたくなります。というのは七十九歳になって、盲目でありながら、それでも満足していると言うのは普通ではありませんから」＞ (新 S.382. 旧版では最後の二文のみ引用 Vgl.S.243)。

5) ヘルダーリンに関して。

5-1 シャルロッテの息子フリッツの自慰。新版では父親の影響を指摘。

＜皆を驚嘆させたヘルダーリンの初期の教育学的成果の後、この子供はこの子供に特有の怠惰、愚鈍に後退している。更に悪いことに、また或る悪習が現れた。これはハインリヒ・フォン・カルプが(男から男へと)すでに教えていたのであった。フリッツはオナニーをするのである。これは当時の医学や教育学の意見では十二分に怠惰、愚鈍、不勉強を説明するものであった＞ (新 S.186)。

＜すでに前もって指摘されていたことだが、また或る悪習が現れた。いかにひどいものかは、彼には敢えて告げられていなかった。フリッツはオナニーをするのである＞ (旧 S.176)。

5-2 ヘルダーリンとホンブルクの皇女アウグステ。(旧版のみ言及)

＜幾らか後に(シャルロッテは夙にまた旅立っていた)彼本人[ヘルダーリン]が戻ってきて、ある職、宮廷図書館司書の職を得さえした。方伯の娘、皇女のアウグステは彼に惚れた。しかしこのことをアウグステの妹マリアンネが知ったのははるか後のことで、マリアンネが夙にプロイセンの皇子ヴィルヘルムと結婚していて、エッダ・フォン・カルプという女官を

有しているときであった> (旧 S.215)。

#### 5-3 ヘルダーリンの詩の掲載年。

ヘルダーリンの詩の掲載年、「1794年のミューズ年鑑」(旧 S.167)、「1793年のミューズ年鑑」(新 S.175)。ヘルダーリンはカルプの息子の家庭教師をしていた時期、同じ屋根の下で キルムス 夫人との間に娘を設けた(一歳で死亡)疑いがあるので、年代には厳密にならざるを得ない。

#### 5-4 ホンブルク方伯に捧げた詩「パトモス」の異同。

|                                                                                        |                                                                             |
|----------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------|
| <p>&lt;善意に満ちている。しかし誰も<br/>一人では神は分らない。<br/>しかし危険のあるところに、<br/>救うものも育つ&gt; (新 S.244)。</p> | <p>&lt;身近に<br/>神はいるが、捉え難い。<br/>しかし危険のあるところに、<br/>救うものも育つ&gt; (旧 S.215)。</p> |
|----------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------|

#### 6) その他の誤植。

ベッターネ・フォン・アルニムの文通相手のフリードリヒ・ヴィルヘルム二世 (旧 S.334)、これはフリードリヒ・ヴィルヘルム四世 (新 S.370)。

シャルロッテの妹、ヴィルヘルミーネの死亡年1803年 (新 S.63)、これは1783年と思われる。また『ヘスペルス』の刊行年月について間違いが見られる (Vgl. 新 S.205)。

### Ⅲ 削除された派生的存在のテキスト

#### 女性存在の問題の歴史的概括 (新旧ほぼ共通)

<フランス革命では史上初めて女性が登場し、更に自由と平等への自分達の要求を公に告げた。36歳のマリー・オブリは、女流作家としてオリンプ・マリー・ドゥ・ゲージェと称し、またフランスの植民地での奴隷制に反対する著述も行っていたが、1791年「女性と女性市民の権利の宣言」をまとめ、それを女王マリー・アントワネットに捧げた。「序言」の中で彼女は、その要求の支柱のために自然を盾に取っている、自然は男性もしばしば、その名前の下で存続する不平等を守るために援用してきたものである。「できることなら、自然の秩序の中に雌雄を探し、調べ、区別してみるがいい。至る所で雌雄が区別なく一緒にいるのを見いだすだろうし、至る所で雌雄はこの不滅の傑作の中で調和的協同社会を形成している。ただ男性だけが例外から原理を裁断している。誇張して、科学を無視して、法螺を

吹いて、退化して、男性は——この啓蒙と明察の世紀に——すべての知的能力を備えている性〔女性〕に対して専制的に命令をくだしている」。

（「この国民議会の最後に、あるいは次の議会の任期中に議会によって決議されるべき」）彼女の宣言の第一条は次のようなものである。「女性は自由に生まれてきており、男性とすべての法において平等である。社会的区別は単に一般の有益性故に基づくものである」。この宣言は決議されなかった。マリー・オブリがロベスピエールの恐怖政治を公然と批判したとき、彼女はギロチンで処刑された。しかし彼女の要求は、消滅することなく、他の地でも求められた。例えばドイツでは作家にして法律家のテオドル・ゴットリーブ・フォン・ヒッペルが1792年『女性達の市民的改善について』考えをまとめ、イギリスではメアリ・ウルストンクラフトがその著名な『女性の権利の擁護』を書いた。

革命的解放的調子の反響はジェルメヌ・ドゥ・スタール夫人の文書にも見られる。それは『すべての国民、個々人の幸福に対する情熱の影響』という表題の下に1796年刊行されたものである。一年後それはドイツ語にも翻訳され、大いに議論された（新 S.220f. Vgl. 旧 S.198f.）。

#### 1) シラーの姉クリストフィーネ宛料理女紹介の手紙

旧版ではシャルロッテはシラーの姉に料理女の紹介を依頼している。これはシラーへの愛を如実に物語るものであろう。シラーと縁の深い人と関係を結び、シラーの好みのものを供しようという自然な計らいが感じられる。

＜彼女はシラーとの面会を単に公の場で、皆の目の前で、それに夫の目の届くところで行わせている。夫はマンハイムの彼女を（手紙から知れるように）規則的に、週に三回訪ねており——確かに自分の好意を示している。勿論こうした公の出会いがあった。一緒に劇場に行き、社交の場で出会い、シラーはしばしばフォン・カルプ夫妻の夕食に招待された。（これはひょっとしたらシュヴァーベン出身の料理女の用意したもので、この女性の推薦をシャルロッテはシラーの好きな姉クリストフィーネに頼んでいる。自分の弟の高貴な女友達を内気に尊敬していたクリストフィーネは時々このような人物依頼を受けている。これはシャルロッテのマンハイムでの家政をちょっと覗く参考になるものである。「お尋ねしたいのですが、忠実で、清潔で、仕事熱心な料理女を私に推薦して頂けませんか。...その仕

事は次のようなものです。通常四人分の料理をすること——市場に買物に行って、私に毎晩その計算を渡すこと、あるいは書くことができなければ、私に口述することです。食器や台所用品を皆清潔にすることと、それに私には女中がいないので、玄関と階段をきれいにし、冬には暖炉に暖房をすることです。私はかなり質素に暮らしていますので、仕事は多くありません」> (旧 S.94)。

シャルロッテは思春期をマイニンゲンで過ごしているが、その地の知識人の例にラインヴァルトが挙げられている。彼は逃避行のシラーの面倒を見ているが、後にシラーの姉と結婚している。ドイツ人には常識的なことかもしれないが、筆者には珍しく思えたのでこの男を紹介しておきたい。

<彼「プフランガー」の友人のラインヴァルトはとりわけ諧謔的な詩を書いている、彼はむしろ不機嫌な、けちな男であるけれども、あるいはそうであるが故にであって、彼が言うには自然は彼の幸運を欺いたのであった、つまり自然が生まれつかせた悲嘆の顔のせいで、彼はすべての世界から疎まれていた。彼の最良の、最も悲しい詩の中でその顔を歌っている。

汝、陰気な悲嘆の顔よ、  
私は汝のせいで世間の悪評を蒙っている。  
私は人嫌いと誹られている  
私のわがままで汝を造ったわけではないのに。

偽りの仮面よ、汝は  
私から名誉と幸福をだまし取った。  
不当にも私から多くの心を奪い  
なおも多くの心を遠ざけている> (旧 S.50f.)。

シラーとシャルロッテはラインヴァルトとクリストフィーネの結婚に反対したが、ラインヴァルトに押し切られ、また父親の願いを容れて、クリストフィーネは結婚した。

<残念ながらシラーのこの懸命な手紙は何の役にも立たなかった。ラインヴァルトの吝嗇、彼の病弱、気まぐれのせいで、結婚生活は哀れなクリストフィーネにとって静かな自己否認の長い受難となった。「私は数知れ

ぬほど犠牲を払っていますが、私がいくら犠牲を払ったか彼は予感することさえありません。——でも私ども女はとにかく依存するように定められています、多かれ少なかれそれに慣れなければなりません」> (旧 S.115. 新 S.121)。もっとも (三角 S.41) では30歳のクリストフィーネには選択の余地はなかったと冷めた論評もしている。

## 2) ゴッティ・フォン・ラ・ロッシュの女性論

シャルロッテの年上の友にゴッティ・フォン・ラ・ロッシュがいる。次々と話題を展開して行く独特な語りの女性であつたらしい。孫にクレメンス・ブレンターノ、ベッティーネ・フォン・アルニムがいる。このゴッティの女性論が旧版では紹介されている。

<女流作家として、これは一般に非女性的なものと見なされ、不信を買う活動であるが、彼女は因習によって女性に定められた境界から出ることのないよう用心し、自分の少女教育者としての崇高な任務に忠実に留まっている。自分の雑誌『ポモナ』の中ですぐにタイトルが約束しているように「ドイツの娘達」を教育している。有名なヒロイン、『シュテルンハイム嬢』では、一人の娘を教育のために修道院にやった後、彼女の言によれば「紙のような[味の無い]少女」を育てている。

勿論彼女はドイツの味の無い娘達を男性の願いに従って育てたのである。すべての女性の歴史は彼女にとって、全く根拠のないことではなかったが、男性の企画や手本に対する女性の模倣、女性の順応の歴史に他ならなかった。「昔の時代に戻ってみよう——男達が教会建設で大いなる貢献を求めていたとき——女達はミサ聖祭の上衣や祭壇の布の刺繍に評判を見いだしていた。領主達の精神が騎士の遊びや真剣な攻撃の際の個人的勇敢さに名誉の輝きを求めていたとき、レディー達は月桂冠を編み、飾り帯を作っていた。——

侯爵達は収入の一部を割いて、修道院を建てた——その夫人達は装身具を売って、その代わり尼僧の住まいを建てた——男達が熟練した獵師になったとき——私どもは騎馬や射撃を習った——男達が旅立ち始めると——外国語が私どもの授業に入ってきた、男達が得意に思っていることについて若干私どもも知るようになるためである。男達はフランスの風習や服、用具を称えた——すると私どもはフランスの有するものすべてを憧れるようになった——遊びに男達が熱中すると、私どもはカルタを切るようになった

た——それに学識の熱が続く——すると私どもは研究し——今や農業に男達は入れ込んでいる、きっと私どもは熱心な主婦となるだろう——男の子達が家庭教師を得ると、私どもは娘達に女性家庭教師をつけた——息子達は大学へ行く——女の子達は料理学校へ行く」。自己皮肉と自己謙譲がこの「詳説」には混じっている。女達はまさにより弱い性であった> (旧S. 110)。

### 3) スタール夫人の自画自賛の小説

スタール夫人はその論説は鋭かったが、小説はいただけないと著者ナウマンは述べている。当時の女流作家にはシラーのポーザのような内的深みが描けていないとされる。旧版ではそのいただけない小説が紹介されている。

くこれらの小説では自己称賛の女性的傾向が詩的願望の形をとってすでに滑稽な装いで勝利を祝っている、というか、現実の勝利の必要がないほどに素朴な厚かましさを勝利を形成している。女流詩人コリンヌの詩人としての栄冠への道を見よう (コリンヌが誰のことか疑念が生じないように、ジェルメヌ・ドゥ・スタール夫人はその衣装で自分を描かせている)。

「彼女はドメニキーノの『クマエの巫女』のような衣装を着ていて、頭にはインド風のショールを巻き、その中では極めて美しい黒髪が編まれていた。彼女のドレスは白で、青色の長衣が胸の下で髷を作り、その衣装は極めて絵画的であったが、しかし一般の流儀から離れていず、わざとらしさは感じられなかった。馬車での彼女の作法は高貴で謙虚であった。称賛されるのは悪い気がしないことは見てとれたが、しかしその喜びには羞じらしいの感情が混じっていて、自分の凱旋に対して許しを請うているように見えた。...

凱旋の列の前に美しく意味深い音楽が奏でられた。音楽で告げられる出来事のたびに、情緒が動かされた。かなりの数の高貴なローマ人や何人かの外国人がコリンヌの乗っている馬車の前を行った。『供をしているのは彼女の称賛者達だ』——と一人のローマ人が言った。——『そうだ』と別の男が言った。「彼女は皆の賛辞を受け入れる。しかし誰にも依怙鼻息はしない。彼女は金持ちで自活している。それどころかその作法で確かと思われるが高貴な生まれであって、ただ知られたくないのだと思われる』——『いずれにせよ』と三番目の男が言った『雲に覆われた神々しい人だ』——

オズワルドはそうように語る男の方を見た。その男の外見はすべて最下層の民のものであった。しかし南国では詩的表現は生来皆が一般に使うもので、あたかも空気や太陽と共に吸うようなものである。

ようやくコリンナの馬車を引いている四頭の白馬は群衆の中に割り込んだ。コリンナは古代風な馬車に座っていた。若い白い服の少女達が彼女の脇に来た。彼女の通り過ぎるところはどこでも大気に芳香がまかれ、誰もが彼女を見ようと窓に近寄ってきた。窓は外側を植木鉢と緋色の絨毯で飾られていた。皆が叫んだ、『コリンナ万歳、芸術万歳、美しいもの万歳』——皆が感動していた。…』

こうしたすべての華美とまた釣り合いをなしているのは、コリンナの真に女性的な弱さで、彼女は愛する段になると、一切の光輝から転がり落ちて、その弱さを見せる。すると彼女は不安に落ち着かない、情熱的に興奮する女性となって、これが凱旋行列の償いに違いないことが明らかになる。彼女にとっては愛の幸せが詩人の桂冠よりもはるかに重要であり（あったのであろう）>（旧 S.300f.）。

#### 4）聖テレジアの教説の紹介削除

年をとるにつれシャルロットは神秘的なものに傾斜していった。その対象の一人が聖テレジアである。旧版では聖テレジアの文言にも踏み込んでいる。

<詩人となろうと欲せず、テレジアはその自伝の中でしばしば大なる詩作をしている。それに関与することが彼女の唯一の勤めである神的光の経験を述べようとしているとき、つまりすべての人間の表現能力を越えたものに対して言葉を見いだせなければならぬとき、詩作をしている。

「自らそうように素敵なものを思い浮かべようと何年間も私は私の想像力で努力してみたけれども、私はできなかった。すでにこのような幻影の光の明るさ、光の輝きが地上で想像し得るもののすべてをはるかに越えているからである。目を眩ますのは輝きではなく、愛らしい白色である。それは目を愛らしく楽しませ、煩わせない注入された輝きである。この神的な美しさを見ることができるよう照らしだす光の明るさも、煩わせることはない。この光は地上で見られる光とははなはだ異なっていて、私どもの見る太陽の明るささえも、目の中に現れる光と比べれば暗く見えるもので、太陽のために目を開けたいとは決して思わないものである。

それはまさに、水晶の床の上に流れ出て、陽光が屈折するととても清らかな水を眺めるようなものである。…太陽が姿を現すとか、この光が陽光に似ているというようなものではない。この光はいつも自然の光として現れるからであり、陽光は人為的な光だからである。それは夜を知らない光であり、いつも光がそうであるように、何によっても暗くされることのない光である。それはどんなに分別のある者でも生涯どのような状態にあるか思い描けない状態にある。しかし神は突然それを眼前に示されるので、そうしなければならないとしても、目を開ける時間すらない。しかし私どもが私どもの意志に反してでもそれを見ることを主が望まれるとき、目が開けられていようが閉ざされていようが、何も関係はない。このときそっぽを向いても役に立たないし、抵抗しても無駄である。努力しても入念にしてもこのとき効果はない。私はこれをただ経験しただけである」。

このような歓喜の後「再び生活に戻ってくるのは苦痛である」とテレジアは言っている。「今や魂は高度な飛行のために風切羽が十分に育っており、弱々しいぶ毛は抜け落ちているからである。…このとき、いかに地上のすべてのものが注目に値せず、それどころか何の価値もないとはっきり分かる」。このような文や他の多くの文を読むと、何故シャルロッテにとって宗教は同時に最高度の詩であったかが分かる、「観照の中で魂は人生の梢に漂っていた」> (旧 S.309f.)。

著者ナウマンはサン・マルタンには批判的で、聖テレジアやアンゲルス・ジレージウスには好意的である。著者は神秘的言説の理解の仕方を説いている。＜神秘的宗教的性質の文言に特徴的なことは、それに関与する者の豊かさと深さを常に有しているということで、それは各人が独自の内容を与え得る器のようなものである＞ (旧 S.316. Vgl. 新 S.341)。

#### IV 新版では削除された些末な事実

##### 1) 落ちた絵

＜「私の父の姉のローテンハーン伯爵夫人が二人の娘と共に訪問した。子守女が末の娘を広間を通して案内したとき、一枚の絵が落ちた。子供は大声を上げて、倒れて痙攣した。何度か発作に襲われた後、数日後に亡くなった。華奢な体ではあったものの今まで病気をしたことのない子供であった。

絵が落ちた原因は何なのか厳密に調べられた。風のせいではなく、杵の強固なリングはまだしっかりしており、逆鉤は壁に数ツォル深く刺さっていた。魔法のせいとはしなかった、しかし説明できなかった」。

霊への信仰をシャルロッテは幼年時代から大人と老齢の年代まで持ち込んだ> (旧 S.21f.)。

<1783年10月25日シャルロッテはハインリヒ・フォン・カルプと結婚した。「かつて絵が落ちた広間で、結婚式が行われた」> (旧 S.85)。

新版では「希望は裏切られた (Spes fefellit)」がライトモチーフになっている。(これは旧版 S.156の表題)。まず鉱山の鉱脈発見に関し (新 S.246)、アメリカのある将軍の遺産に関連して (新 S.283)、息子アウグストの死に関連して (新 S.318)、シャルロッテの出版計画に関連して (新 S.333)。

## 2) 裁判の実態

### 2-1 まず新旧共通して紹介されている裁判の実態。

<戦わずして「マリスフェルトの者達」にこのような豊かな獲物を渡す気はなかった。ゲッティンゲンから最終的な死の知らせが着く前にもう始まった熱い活動について、後見人のフリードリヒ・アルブレヒト・フォン・ヴェヒマルは詳細な報告をまとめているが、それはいかにして18世紀のこれらの騎士が所有のために戦い、奪ったか示している。もはや武器の助けを借りるのではなく、公証人の助けを借りるのであって、公証人は「占有獲得」の正式な文書でまず一度既成事実を創るのであった (この事実はそれから勿論裁判で争われうるものであった)> (旧 S.73. Vgl. 新 S.75)。

### 2-2 旧版での細かい裁判の実態。

<この巨大な額はどのようにして生じたのか。多分そのごくわずかな部分はカルプ兄弟に言われる贅沢な暮らしで消えたのであろう。しかしそれ以上に——占有獲得の結果として——確実に、高額な裁判費用で失われていた (多くの者が当時裁判をして貧しくなった)。

(多くの錯綜する個々の点をまとめる) 争点の中心には完全私有地、つまり自由になる家族財産からの男系封土の分離がある。しかしこの争点では結局より強力な利害、一方ではヴェルツブルクの封土局の利害、他方では帝国騎士団の利害が主張され、当事者達が和解を望んでもどうしようもなかった。訴訟相手 (バンベルクの連隊長アウグスト・マルシャルク・フォ

ン・オストハイムに代表されるマリスフェルトの家系) に対して、1664年からのヴェルツブルクの授封状がダンケンフェルト周辺の荘園や森について言及している内容が認められた。従ってそこに記載されてないものを、完全私有地の女性相続人達は自分達のもので主張できた。これで多くが明確になったが、しかし必ずしもすべてではなかった。例えば「ゼースビュール近郊の森、ゼースホルツと内部ツェトリッツと呼ばれるもの」は女性相続人達の代理人が主張するように、一つの森のことなのか、それとも訴訟相手の主張するように二つの別々の森のことなのか。他のすべては事実上夙に結審しているのに、一つのコンマの意味の審議が—— 別々に数えているのか、同格なのか—— たとえ裁判費用が争点の森の価値を夙に上回ったとしても、更に続いた> (旧 S.157)。

### 3) ブーフヴァルト夫人の逸話

<シャルロッテは老レディーの許へのこの訪問を親密な祝典として体験している。「或る日彼女は一人でいるからと知らせてきた。—— 彼女は幅広の縞模様の所謂ナイトガウンを着ていた。灰色と薔薇色である。私は気に入った。彼女は言った、『送り返そうと思ったの、でもこう返事が返ってきたの、皆様七十歳ではまた薔薇色を召されます』。侍女が入ってきて、紅茶を給仕してくれた。中国製の磁器で、銀メッキしてあり、それに金の箱の紅茶はフリードリヒ大王の贈り物であった。こうしたものすべてが十二分に立派で、得難いものであった。こうした花の香りと彼女の話とでこの時間は比較しがたいものであった」。この機会を得られたのは、フォン・ブーフヴァルト夫人を通常この時間に訪問する習慣であった友人や崇拜者達の遠出のお蔭であった。彼らは墓を見物に出掛けたのであった。それは老夫人が虚栄心から、忘却されることを恐れて、ローマ風の様式で建てさせたものであった。「この時間のうちにも墓を見た何人かが戻ってきた。生きている女性にその記念碑は気に入ったと述べるのは奇妙な気持ちだったことだろう。ローマ風の墓の模倣を非難するとしたら彼女は傷ついたに違いない。彼らはそこにやはり古代人の慣習に従って、亡霊への奉納にワインと蜂蜜と菓子を見つけて、それを味わったのであった」。

三年後にフォン・ブーフヴァルト夫人は精神を錯乱させて亡くなっている。彼女のローマ風の墓に彼女は埋葬されなかった> (旧 S.119)。

## 4) フーフェラントの仕事ぶり。

## 4-1 旧版での法外な仕事ぶり

＜フーフェラントは法外な仕事をした。自分の厳しい職業倫理がそのことを要求したからばかりでなく、彼は当時のほとんど皆がそうであったように、ほんのつましい露命をつなぐために今日の我々よりもはるかに多く働かなければならなかったのである。彼は四百冊を越える本、諸論文、専門誌への記事を朝の五時から（冬は六時）、八時の間に書き、その後夕方遅くまで診療した。ヴァイマルの若い医者として彼は町の市民ばかりでなく、周辺の村々の住民まで診察し、これは悪路のためにとりわけ春に辛く困難なものであった。それから家に帰り、自ら薬の準備をし、分配し、最後に更に一日の仕事に関しカルテを書いた。イエナの教授に昇進したときも、四日間の講義の他に多くの診療をこなした＞（旧 S.250）。

## 4-2 離婚（新旧共通）

＜重苦しい気持ちでフーフェラントは1806年秋自分の家族と別れなければならなかった。侍医にとって国王一家の供をすることは義務であった。彼の妻が5人の子供達と彼の後を追って来たとき、彼は家に追い返した。かくてすっかり失うことになった。誰の証言でも美しく、活気のある女性とされる彼の妻は、夫の職業上の義務のためにいつもその願望や欲求が後回しにされていたが、数年前から家に暮らしていた助手のエルンスト・ビショフに心を向けることになった。両者の関係は公然たるスキャンダルとなり、フーフェラントにとってそれ故離婚は義務となった。「自分の人生の最大の不幸は」と彼は呼んでいる「単に現世の関係のせいではなく、神の掟そのものによって（この掟がなければ決して決心することはできなかったであろう）定められた、そして覆せない義務となった離婚、18年間の結婚生活で7人の子供を設けた私の妻との離婚である」＞（旧 S.270. 新 S.304）。

## 5) ファウスト本入手次第

＜シャルロッテは或る読書サークルで予約していた。しかし多くの本はファルンハーゲンに取り寄せてもらっていた。彼はしばしばベルリンの書籍商や図書館司書よりも先に新刊を入手していた（『ファウスト』を最初に入手できなかったとき彼は少しいらいらしている。『ファウスト』の完本をまだ私は手に入れていない。ベルリンでは誰も入手していないが、例

外は皇太子で、フォン・ミュラー大臣が一部ヴァイマルから皇太子に送ったものだ。皇太子は大いに喜んで、これまでのところこの全く珍しいものを有する唯一の方だ。最初皇太子は誰かにこの本を覗かれることさえ嫌がっていた。しかし自分が通読してしまうと、フォン・ヴィリゼン大尉に譲って、彼はそれを一晩かかって読み、その後アレクサンダー・フォン・フンボルトに与えて、それからフンボルトはテーゲルの兄に渡すことになった。それでこの本も、今ベルリンにあるとはいえない」> (旧 S.336)。

## 6) ベルリン大学学長選

<存命の精霊達の集い（これにはシャルロッテにとってアーヒム・フォン・アルニムも含まれていて、彼は1811年初頭ゾフィー・フォン・ラ・ロッシュの孫ベッティーナと結婚している）——「その集いはとりわけベルリン大学によって増えている」。シュタインの下、導入された改革の一つにプロイセンの教育体制の改編もあった。ヴィルヘルム・フォン・フンボルトが教育と文化事業の最初の大臣としてプロイセンの首都へ招かれて、この職で人文主義的ギムナジウムの創設者となった。すでに以前から計画されていた1810年の大学の創設にも彼は本質的関与をなした。フィヒテが哲学教授に招聘され、初代の学長に選ばれた。11票対10票のわずかな差で偉大な法学者ザヴィニーに勝っている（ザヴィニーはベッティーナの姉と結婚しており、失恋したカロリーネ・フォン・ギュンデローデの大いなる初恋の相手であった）。著名な科学者や学者の招聘でプロイセンの首都は知性の首都ともなった。学生数は急速に増えた> (旧 S.277)。

なおギュンデローデ [ティアン] の自殺についての言及 (旧 S.268. 新 S.302)。

## 7) 三角関係の流行

<ケルナー宛の手紙の中で彼はむしろ「三角関係」、三人での共同生活を考えている。これは当時の文芸の中で試みられているものであるが（例えばルソーの小説『新エロイズ』）、しかし実生活でも見られる。作家のゴットフリート・アウグスト・ビュルガーは二人の姉妹との共同生活を——一方の娘とは結婚し、他方の娘は愛して——文学的に一般に知らしめていた> (旧 S.125)。

## V 最も面白かった箇所

ヘルダーリンとゲーテとの遭遇。

＜「私は中に入った。親切に挨拶されて、奥に余所の男がいたがほとんど気付かなかった。その男の表情、それにその後も長いこと話しぶりは何ら変わったことを予感させなかった。シラーは私の名前を彼に紹介し、彼の名前を私に紹介した。しかし私は彼の名前が分からなかった。冷たく、ほとんど彼に視線を向けずに、私は彼に挨拶した。そしてただ自分の内と外でシラーに没頭していた。余所の男は長いこと一言も言わなかった。シラーは『タリニア』を持ってきた。それには私の『ヒュペーリオン』と運命に寄せる私の詩の断片が印刷されていて、それを私に渡した。シラーがちょっとその場を外すと、その余所の男はジャーナルを私の立っていたテーブルから取り上げ、私の横でその断片をめくって、一言も言わなかった。私は次第に赤くなるのを感じた。今私の知っていることを知っていたならば、私は蒼白になっていたことだろう。彼はそれから向き直って、フォン・カルプ夫人のこと、我々の村の一带や近隣の人々のことを尋ねた。私はこうしたことすべてにいつになく寡黙に答えた。しかしとにかく不運の時を過ごしたのだ。シラーがまたやって来て、我々はヴァイマルの劇場のことについて話した。余所の男は二、三言葉を発した。それは十分に重要なもので、私は何かを感じてもよかったのだ。しかし私は何も予感しなかった。ヴァイマル出身の画家マイヤーも更に来た。余所の男は彼と共に色々なことを話した。しかし私は何も気付かなかった。私は出て、その日教授達のクラブで、いいかい、こう聞いたのだ、ゲーテがこの日の昼シラーの許にいた、と」＞（新 S.194f. 旧 S.181f.）。

## Ursula Naumanns *Schillers Königin*

Norimi TSUNEYOSHI

Die im Jahre 2006 von Ursula Naumann unter dem Titel *Schillers Königin* als Insel-Taschenbuch veröffentlichte Biographie Charlotte von Kalbs ist eine Neufassung des im Jahre 1985 im Metzler Verlag erschienenen Werkes *Charlotte von Kalb: Eine Lebensgeschichte (1761-1843)* der gleichen Autorin. Zwischen der neuen und der alten Fassung gibt es einige wichtige Unterschiede, besonders die Intension der Autorin scheint sich verändert zu haben. Während in der neuen Fassung die Bedeutung der Person Charlotte von Kalbs für Schiller und Jean Paul betont wird, wird in der alten hauptsächlich die „abgeleitete Existenz“ Charlotte von Kalbs als Freundin Schillers und Jean Pauls thematisiert. In der Neufassung werden darum nicht wenige kuriose Tatsachen hinsichtlich des „schwachen“ Geschlechts weggelassen, wie z.B. die Probleme von Charlotte mit der Orthographie. Außerdem werden ihr Brief an Christophine, in dem sie Schillers Lieblingsschwester um die Empfehlung der Köchin bat, Sophie von la Roches Theorie über Mann und Frau, der Text „Corinna“ von Madame de Staël, die Anekdote vom Grab der Frau von Buchwalt, die Autobiographie der heiligen Therese u.s.w. sind leider nicht mehr erwähnt.

In der Neufassung finden sich natürlich auch die folgenden neuen Erklärungen und Hypothesen:

- 1) Die Antwort des Verlegers Schwans an Schiller war nicht negativ, sondern positiv.
- 2) Charlotte war nicht die anonyme Verfasserin des Briefes, in dem Lotte von Lengefeld beneidet und vor deren Verhehlung mit Schiller gewarnt wurde.
- 3) Schiller bezeichnete in einem Brief Charlotte als XXX.
- 4) Sinclair starb möglicherweise im Bordell.

- 5) Fritzens Onanie war durch seinen Vater vorbereitet worden.
- 6) Hölderlins Gedicht in einem Brief Schillers erschien nicht im Musenalmanach von 1794, sondern in dem von 1793.
- 7) Der Landgraf von Homburg las die zweite Fassung des „Patmos“.
- 8) Bettine von Arnim schrieb nicht an König Friedrich Wilhelm II., sondern an Friedrich Wilhelm IV.

Es finden sich in der Neufassung aber auch die folgenden Fehler. Zum einen starb Wilhelmine nicht 1803, sondern wahrscheinlich 1783 (Neufassung: S.63), und zum anderen erschien Hesperus im Jahre 1795 (vgl. Neufassung: S.205).

Hinsichtlich Themas „Zufriedenheit“ Charlotte von Kalbs möchte ich folgendes anmerken:

- 1) Charlotte wurde als Mädchen geboren, d.h. unzufrieden (Altfassung: S.11; Neufassung: S.14).
- 2) Charlotte war wohl mit ihrem Aussehen unzufrieden (Altfassung: S.60).
- 3) Ihre Stiefmutter sagte in ihrer letzten Stunde zu Charlotte: „Lebt in Zufriedenheit!“ (Altfassung: S.53).
- 4) Charlotte beneidet die Frauen des Südens (Altfassung: S.109).
- 5) Herder ist ebenso unzufrieden wie Charlotte (Altfassung: S.137; Neufassung: S.147).
- 6) In der Neufassung (S.156) wird Schiller folgendermaßen zitiert: „Geschöpf, ohne Talent glücklich zu sein, wie könnte sie also geben, was sie selbst nicht hat.“
- 7) Hölderlin ist ebenso unzufrieden wie Charlotte (Altfassung S.175; Neufassung S.184).
- 8) In der Neufassung (S.382) wird die Zufriedenheit Charlottes im Alter von 79 Jahren betont (vgl. Altfassung: S.243).

Während in der alten Fassung über Charlottes Unzufriedenheit auch viel spekuliert wird, werden in der Neufassung ihre Unzufriedenheit und Zufriedenheit eindrucksvoll objektiv dargestellt.

Zuletzt soll erwähnt werden, dass ich Ursula Naumann fragte, ob Schiller und Jean Paul letztendlich nur deshalb Charlotte nicht heirateten, weil sie

keine Jungfrau mehr war. Darauf antwortete sie mir: „Dass Charlotte ‚keine Jungfrau‘ war, wird für Jean Paul und Schiller sicher ein wesentliches Ehehindernis gewesen sein, mindestens ebenso wichtig für ihre Entscheidung gegen eine Ehe mit ihr aber war sicher die Tatsache, dass sie eine sehr kluge, selbstständig und unkonventionell denkende Frau war, die ihnen unbequem geworden worden wäre und die sie sich als brave Hausfrau und Mutter schlecht vorstellen konnten. Ich hoffe, dass das auch aus meinem Buch klar geworden ist?“